

答への先に

χカイχ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第5次聖杯戦争を終え、答えを見つけたエミヤは藤丸立香と名乗る少女と共に戦っていく。

目次

始まりの絆	1
紫盾の後輩	6
黒き剣王	9
オルレアンの聖処女	13
百合の王冠	19
祈りの聖女	22

始まりの絆

それはいつも唐突にやって来る。何度経験してもなれないこの引き寄せられる感覚と共にエミヤは召喚に応じた。

「(なにより、凜との約束もある。答えに向かつて、精々抗つてみるとしよう。)」

そして、強い光が発生し自分が召喚されたことを自覚する。

「さて、私のような3流を呼んだ未熟者はどこのどいつだ?」

気を付けようとは思っていたがいつもの皮肉げな一言からのスタートとなつてしまった。

「あれ、アーチャーだ。知ってる人で良かったあ。あ!私、藤丸

立香!!これから宜しくね!」

しかも自分を呼んだマスターがつい先程まで自分が敵対していた相手だったとわかつた瞬間エミヤは無意識に頭を抱えた。

「…あー、仕方あるまい。サーヴァント、アーチャー。エミヤ・シロウ。召喚に応じ参上した。今は君が私のマスターだ。全霊で君を守ろう。なに、3騎士に恥じぬ戦果を保証するよ。」

「ツ、あつ、マシユ。マシユ・キリエライトです。エミヤさん、よろしくお願いします。」

「さて、ではまず君達の信頼を得る為にも食事でも作ろうかね、少々待っていてくれ。」

「うん、分かった。…ふう、召喚に応じてくれたのがエミヤで良かったねえ、マシユ。」

「えつ、あ、はい。そうですね…」

「うん？まだ怖いの？」

「そう、なのかもしれません。」

「まあ、1番最初に弓で撃つてきたのがエミヤだからね、仕方ないと思うよ。でも、これから一緒に戦っていく仲間なんだし、3人で頑張っていかなくちや。ね？」

「はい、そうですね。私のサーヴァントとしての力もエミヤさんに色々教えてもらわな
いと。」

「うん、それじゃあそろそろ行こっか。」

「はい。」

☆☆☆☆

「む、丁度いいところに来たな今出来上がったところだ。さあ、あまり褒められたものは無いが、良ければ食べてやってくれ。」

「いやいや、凄いいね！ここにきて和食が食べられるとは思ってなかったよ。パクッ

うん！凄く美味しい！」

「では私も、頂きます。パク ……美味しい、です。」

エミヤの料理はとても好評で、カルデア職員全土に知れ渡り、何故か料理長を務めることとなった。

それだけでは終わらず、職員の疲労に気づいたエミヤはストレスが溜まっではいけないと、暇な時間を見つけては女性職員をお茶に誘い、生前執事の仕事で培った給仕力でメンタルセルフケアを行った。翌日からは職員たちにも笑顔が戻り廊下ですれ違う度に好意の視線を向けられるようになるのだが、彼はそんな事に気づくこともなかった。

そして本日は、

「よし、そろそろ良いだろう。立香、終わったぞ。」

自分の主の髪を解いていた。

「ええくもう少しやってよお。」

そう言いながらエミヤの腰に手を回し太ももに頭を乗せた状態で膨れる。

「我がままを言うな、立香やり過ぎも返って髪を傷めてしまうからな。」

「ぶうー。じゃあ、このまま寝させて?」

「全く。君はいつたい幾つなんだそうやって甘える歳でもないだろうに。」

「エミヤはなんか安心するんだよ。って言うか、職員の人達に一体何したのさ、いつも私がエミヤと一緒に居るから羨ましいって言って、皆凄いなんだよ?」

「ふむ。私は特に何もやって居ないと思うがな、」

「ほおんとにいく？」

「なんだ、信用出来ないのか？」

「うーん、エミヤはなんか普通は恥ずかしがるようなことも普通に言ってくるからなあ、それと関係があるんじゃないかなあ？」

「なに？全く心当たりが無いが、気の所為ではないのかね？」

「はあ、ダメだこりゃ。（今も会話してる最中にずっと優しく頭を撫でてるのとか、無自覚なのかなあ…）」

「む、腑に落ちないが、まあ良いだろう。立香も段々返事が曖昧になって来ているな、少し休め。」

「うーん、じゃあ、そうするよ、おやすみ。」

「ああ、お休み。」

「…さて、私もそろそろ夕食の準備をしたいのだが、「Zz…」まあ、たまにはのんびりした日も、良しとするか。」

先程から変わらず腰に手をまわし、座るエミヤの下半身に抱き着いた状態で眠る立香の頭を撫でながら、エミヤは独り言ちるのであった。

そして、その後。目が覚めた立香が慌ててエミヤの部屋を出て行ったのは言うまでも

ない。

紫盾の後輩

今日のエミヤは珍しく暇を持て余していた。既に食事の準備は済ませているし、ダ・ヴィンチに頼まれていた仕事もあらかた片付いた。食堂で新たなデザートの研究もありだが、それよりも彼はカルデア内を散歩する事を選んだ。

何処までも終わりを感じさせない曲がった廊下。外は常に吹雪いていて1度暇になつてしまうと本当に時間が過ぎていくのが長く感じられるようになる。

「む。あれは、マシユか？」

そんなエミヤの視界に特徴的な薄紫の頭が見えた。どうやら書類を運んでいるようだ。

「あれでは前が見えないだろうに……どれ、少し手を貸しに行くとするか。」

その時だった、こちらに気が付いたマシユがバランスを崩し、山積みになつた書類と共に階段から落下し始めた。

「ツー！」

咄嗟のことで反応できなかったマシユは目を閉じ歯に力が入る、しかしやってきたのは強い衝撃ではなく温かく、優しい抱擁だった。

「全く、一人であの量の書類を運ぼうとするな。前が見えていないのならば尚更だ。」
そこでエミヤが助けてくれたのだと自覚した。

「…」

「どうした？ 頭でも打ったか。」

「つは！ いえ、なんでもありません。ありがとうございます。エミヤさん」

「ああ、お安い御用だ。その書類、半分は私が持とう。今は時間に余裕があるのでな、手
伝わせてくれないか。」

「では、お願いします。」

書類を数冊受け取り、何故か小走りで自分の前を進むマシユの顔は赤みがかっていた
が、エミヤは当然、それに気付く訳も無かった。

「さて、ここでもいいのかね？」

「はい、本当にありがとうございます。」

「なに、困った時はお互い様、だろ？ そろそろ夕飯の時間だ。食堂に向かおう。」

「分かりました。…エミヤ先輩。先程のお礼がしたいので、夕食のお手伝いを、させて下
さい…。」

「…そうだな、確かに人手が多いに越したことはないか。ああ、それではしっかりと働
いてもらおうか。」

「はいっ！」

その日はいつも滞っていた厨房から注文者への料理の運搬もマシユの働きによりいつもの数倍良い結果となった。

「さて、お疲れ様。マシユ。」

「いえ、私は先輩の作った料理を運んだだけですの。」

「君のおかげで私は料理に集中する事ができた。これを君のお陰だと言わず、なんと言おうのだね？」

エミヤにそう言われ、素直に「えへへ」と、喜ぶマシユの姿を見て一瞬、自分を支えてくれた後輩が過ぎる。

「ああ、ありがとう。」

そんなことを呟き、優しい笑顔でマシユの頭を優しく撫でる。

「せ、せせせせ先輩!? なつ、なんですすか急に／＼／＼」

顔を真っ赤に染め、あたふたしながらも全く離れる気のないマシユを可愛げに思いながら2人はその後エミヤ特性の紅茶を楽しむ談笑した。

黒き剣王

オルレアンへのレイシフトに向けて

立香は2度目となる召喚を行おうとしていた。

「さてと、エミヤがオールレンジだからここで補助系のサーヴァントが来てくれると嬉しいんだけどなあ。」

「はい、エミヤ先輩の戦っている姿を見ていたいですしね!!」

「…うん?どつたあ?マシユ。」

「あつ、いえ。なんでもないです／＼／＼」

「ふーん?…まあ、いつか!早速喚ぼう!!」

召喚時発生する2度目の閃光、これに慣れるには時間が掛かりそうだ。

そして聞いた事のある声が聞こえてきた。

「サーヴァント、セイバー。ほう、貴様が私のマスターか。」

「なっ、あの時の…!」

「ああ、そんなに怯える必要はない。私が貴様のサーヴァントとして喚ばれたからには貴様に従おう。」

「あ、うん。ええつと、私の名前は藤丸立香。よろしくね。」

「…私はマシユ・キリエライトです。よろしくお願ひします。」

「アルトリア・オルタだ。好きに呼べ。」

「う、うん。…それじゃあ！この施設内を案内するね！」

「わかった。」

—「それで、ここがアルトリアの部屋。だいたい覚えられたかな？それじゃあ、適当に歩き回つてもいいから、私は行くね。」

「…ふん。あんな小娘が人理の修復…か。面白い。少し歩いてみるか。」

オルタは散歩のつもりだったが、そんな訳もなく、先程立香に教えて貰った食堂に来ていた。

「邪魔するぞ。…なっ！シロウ!?お前もあのマスターに喚ばれたのか。」

「ん？ああ。セイバー、来たか。君の事だ、此処に喚ばれてまず食事をすると思つたのでね。既に作つてある。」

「おお！流石だなシロウ。もきゆもきゆ…」

「…冬木でのあれはすまなかつた。別れの挨拶すらすることが出来なかつた。まさか、クラスチェンジしたあいつにすら勝つことが出来ないとはな。」

「もきゆもきゆ…おかしなことを言うな、シロウ。お前は私とあやつらが戦つていた時

遠目で見ていたでは無いか。」

「やはり気づいていたか、あれはだな……」

「いや、分かつている。お前はどこまでも優しいからな、全く、他人の事など気にせずと私を見ていてくれればいいのに……」

「……すまないが、ここでの仕事は大半が私が掛け持っているのですね、ずっと君と居られる訳では無いんだ。とはいえ、私の入れる紅茶で良ければいつでも君のお相手をさせてもらおう。」

「……ふっ。相変わらずだな、私の言っている意味が全く理解出来ていないではないか、この朴念仁は。」

「む、それはすまなかった。私にも分かるようにもう一度言ってくれないか？」

「いや、良い。お前はお前のままが一番だ。シロウ。」

「そうか、よし。今日からは少し多めに作らないとな。セイバー、何かリクエストはあるかね？」

「そこで夕飯の話か……ふふ、お前らしいな。」

「さつきから一体なんの話をしているのだね、君は。」

「なんでもない。では、ハンバーガーを頼もう。」

「了解した。君が満足する量と質を約束しよう。」

「ああ、それとシロウ。」

「…なんだね？」

「私の事は『セイバー』ではなく、『アルトリア』と呼べ。」

「べつにそれは構わないが、」

「これから私以外のセイバークラスもここに召喚されることになるだろう。そうなった時に不便だからな、今のうちに名前で呼ぶ練習だ。」

「ああ、分かったよ。アルトリア：うん、私もこちらの方が好ましい。改めて、これから宜しくな。」

「当然だ、私はお前の剣。それは今になっても変わらない、だが、お前は私の騎士でもある。失望させるなよ？シロウ。」

「愚問だな、アルトリア。君の騎士が最強でない筈がないだろうか？」

一見仲の悪そうな彼らだったが、しかしそこには、確かな信頼関係が結ばれていた。

オルレアンの聖処女

ついに始まったレイシフト先で立香達はジャンヌ・ダルクと名乗る少女と出会い、協力することとなった。

一通り説明も終え、エミヤ特性のワイバーンのステーキで夕飯も終えた頃だった。立香は明日に備え既に眠りに着いている。マシユもまだサーヴァントの身体に慣れていないのか立香の元へ行き少し睡眠を取ると言って離れた所にあるテントへと向かって行った。

エミヤが夕飯の片付けを終えて焚き火の前にちよこんと座るジャンヌの隣に腰を下ろした時だった。

「エミヤさんは、近代の英霊だと仰っていましたね。今の人々は…まだ互いに争っているのですか？」

「…ああ、私の居た日本はとうの昔に戦争をしないと宣言してからは一度も戦争に発展したことがない。しかし、今でも戦争はやはり存在している。それこそ、私が抑止力として治めてきた争いなど数え切れんよ。」

「そうですか…」

「全ての人が争わず救われるなど、やはり不可能なのだろうな。」

「はい、私も理解してはいるのですが。でもそれでも、全ての人を救いたい願うのは間違いないのでしょうか…?」

「いいや、間違いでは…ないよ。誰かに幸せになって欲しいと願うのは誰だって思う理想だ。それが個人から全ての人へ多くなっただけに過ぎん。だから、君の想いは決して、間違いなどではないよ。」

「そう、ですよ。ありがとうございます、エミヤさん。」

「君の事だ、きつと竜の魔女も救ってやりたいと思っっているのだろうか?」

「ツ!よく、分かりましたね。」

「なに、私も君の考えには賛成だ。竜の魔女も、フランス兵も、君も、全員助けて初めて救ったと言えるのではないかな?」

「私も、ですか?」

「ああ、君は自分の後悔はないと言ったな。火刑に処した彼らを誰一人恨んでいないと。だが…無念はあるのでは無いかね?」

「それは…」

「ならば君のその無念も晴らし、オルレアンの人々を救い帰る。それが私の願いだ。何度も経験した、無可能に近い愚かな考えだがね、それでも私は自分の理想を否定したく

ない。」

「エミヤさんらしいですね。今日の戦闘でもそうでしたが、貴方は優しすぎます。それこそ、私が目指すような在り方です。」

「かの聖女にそこまでお褒め頂けるとはな。だが、君も自分が弱体化している中周りの兵を守りながら童の魔女を撃退していたでは無いか。まあ、兵士達は混乱していたがね。」

「ふふ、1人でも多く守れたなら私も本望です。…あの、エミヤさんは生前どんな方だったのですか？差し支えなければお聴きしたいのですが。」

「構わないが、私の人生など余り聞いていて気持ちのいいものでは無いぞ?」

とは言ったが、エミヤもジャンヌの過去の話を聞いていた上、瞳から伝わる彼女の意思は揺るぎの無いものだった。

やれやれ、と溜息をつき観念したようにエミヤは自分の過去の話をした。

「…エミヤさんも、私と似たような人生を歩んでいたのですね。」

「いや、君ほど大それた生涯では無かったよ。後悔はある、やり直しなど、何度望んだか分からない。それでも、自分の抱いた理想は間違いないかと、鏡に写る自分と言われてしまつてね。」

「それでも、やつぱりすごいと思います。無可能だと理解してなお理想に向かう姿勢は

私は好きですよ？シロウさん。」

「君もか…」

それはアルトリアオルタが来てからだ。彼女はカルデア内でエミヤの名前を連呼している。自然と周りの女性陣にも知られ、今もジャンヌにまで名前で呼ばれる始末。

しかし、それは記憶のすり減ったエミヤにとって、人の温もりを思い出させるいい切っ掛けとなりそれをエミヤ自身も少なからず心地よく感じていた。

先程、何事も無かったように話を流していたが、弱体化して上手く戦闘を行うことが出来なかったジャンヌが兵士を守りながら竜の魔女達と互角にやり合えたのはエミヤが援護をしていたからであつた。

彼は当たり前のようにジャンヌがピンチになると一撃で相手を無力化させたり、ジャンヌを抱きかかえて回避したりと、あまりにもずば抜けた戦闘力でジャンヌのみならずまだ決定力の無いマシユの補助も行っていた。

確かに彼は強い、強すぎると言つていいほどだ。個人の戦闘力ならアルトリアオルタとは比べ物にならないだろう、しかし、周りをよく見て行動するという判断力はアルトリアを上回っている。

それが彼の戦闘スタイルでもあるからだ。バーサークランサーと対峙した時も、守りのスタイルを貫き決定的なカウンターで圧倒していた。

その時から既にジャンヌは彼に惹かれていたのかもしれない。

ふと、隣に座る彼の横顔を見つめる。整った顔立ちと、戦闘時髪を上げている時とは違う幼さを持ち、脱色した髪や肌からは生前の過酷さを物語る。ジャンヌは先程から止まらない動悸にもはや心地良さを覚え彼の左腕を胸元に抱き寄せ、温もりを感じ合える距離に座り直す。そんなジャンヌの行動にもエミヤは「寒いのか？少し待ってくれ。」と言つて防寒具を投影し始める始末だ。

全く気がついて貰えない悲しささと不満を押しえ込み、声をかける

「シロウさん、この毛布2人で使いませんか？」

「いや、私は寒い訳でもないのね、君が気を使う必要は無いんだよ。」

「もうッ!!…では！くつついた方が温まると思うので是非入って下さい。」

「まあ、それならば。」

と言つて2人で同じ毛布にくるまる。

「むふふ、入つてしまいましたね？もう逃がしませんよ。」

ガツチリとエミヤの左腕を豊満な2つの部位で挟める。

「ジャンヌ?…ジャンヌ?あー、ジャンヌ?」

「なんですかあ?シロウさん♪」

「いや、なんでもないよ。ハハ。」

会った時とは対象的なジャンヌの態度に最早ジャンヌの名前を呼ぶことしか出来なくなつたエミヤだが、(きつと甘えることを知らなかつたのだな。)と勝手に解釈し、考えることを諦めたエミヤはやはり何処までも女性に対しては柔らかかつた。

そして、自分の行動に流石のエミヤも狼狽えているだろうと残念ながら空振りで終わってしまったジャンヌは自分の行動に耐えられなくなり、エミヤの胸に顔をうずめると言う本人が意図せずかなり積極的な行動をとることとなるが、それにもエミヤは優しく抱擁してあげるのであつた。

その後、テントの見張りから小腹が空いたとやって来たオルタが焚き火を前にまるで恋人のようにくっつく2人を見て暴れ出すのはまた別の話。

百合の王冠

2度目の竜の魔女達との戦闘で押されていた立香一行だったが、それを救ってくれたのが今エミヤの目の前で紅茶を楽しんでいる可愛らしい少女だ。

「ねえねえ！エミヤは近代の英霊なのでしょう？近代では文明の発展が素晴らしいと聞いわ。現に遠い所の人と会話していたし、なのに貴方は料理も上手だし気が利く、それにこの紅茶もとても美味しいわ。マスターやマシユを見てみると余りそうだった事は得意じゃなさそうだったのだけれど、貴方の仕事っぷりは本当に素晴らしいわ。王宮に欲しい逸材ね。」

「過大評価しすぎではないかね？王妃殿。確かに私は生前身に付けられる術はできる限り会得したがそれでも全て三流がいい所だよ。」

「まあ！王妃殿ですって！？そんなのちつとも可愛くないわ。マリーと呼んでちょうだい。アマデウスみたいにマリアでも良いのよ？」

「あ、ああ、善処しよう。マリー……？」

「本音を言えばマリアと呼んで欲しかったのだけれど……我儘を言っではいけないわね。それと！貴方の技術は三流なんかじゃないわ。しっかり自信を持って？貴方はこれか

らもマスターやマシユ、色々な人の事を守ってあげないとなんだから！あの子達も貴方に守って貰えた方が嬉しいでしょうしね♪」

「勿論これからも彼女たちを全霊で御守りしよう。そのつもりでいるが、自衛は出来ないと。立香は兎も角マシユ達はこれからの戦闘で私が助太刀に入る前にどうにかしてもらわんと困る。」

「どうしてそう捉えてしまうのかしらね…まあ、貴方はきつとこれからも自分の身を呈してまで多くの人を救うのでしょうかね…」

「守れるものを守るのは当然だろう。それに、まだウチには女性しかいないのでね。守らざるを得ないんだ。」

「…それでもね、貴方が傷付いて悲しむ人の事もしつかり考えなさい！それが自分を守つての事だしたらその子は尚更自分を責めてしまうわ！」

「…そう、だな。自惚れるつもりも無いが彼女達は嬉しいことに私に好意を抱いてくれていることだ。悲しませるなど有ってはいけないな。」

「あら、意外と分かっているのね。安心したわ。」

「まあ、その好意というのも良くて尊敬やその辺りの点でだろうが。」

「…」

「む、マリー？どうしたんだ？急に黙って。」

「もうッ！折角見直したのにやっぱり貴方ってこうなのね！」

「ま、マリー？私は何か間違ったことを言っただろうか？」

「はあ、貴方は貴方らしくするのが一番ね。∴ジャンヌがね、あの子。まだやっぱり気を負っているみたいなの。私も声を掛けてはいるのだけれど、あまり、届いていないみたいなの。」

「そういう事なら任せたまえ。優しすぎるのは彼女の長所であり短所だからな。私に出来ることなら出来る限りを尽くそう。」

「ふふ、素直で宜しい！ご褒美を上げちゃうわ♪」チュツ

「なっ！マリー！！そういう事を軽くするんじゃない。」

「軽くなつてないわ、私がしたいからしただけよ。それにしてもエミヤ。貴方、意外とうぶなのね、とつても可愛らしいわ♪」

「勘弁してくれ…」

祈りの聖女

マリーにからかわれ少し不貞腐れていたエミヤだったが、丁度いいタイミングでジャンヌが立香の元から戻ってきた。

ジャンヌが加わり話も盛り上がったが、エミヤは結界の確認をしに輪から抜けた。

「ふむ、正常に作動しているな。あの竜…：ファヴニールか、私が竜殺しの剣を投影したとしてもアレにはイマイチ勝機が見えない。まずはあの竜をどうにかする事が最優先なのだが、如何せん手詰まりか。」

「あら…：昼間の勇姿とは裏腹に案外諦めが早いのかしらね？」

「!？」

「ああ、待つて。別に貴方と敵対しようとは考えていないわ。黒い聖女様に喚ばれたから大人しく従つてはいるけれど余りこういうのは好きじゃないのよね。」

「君は味方なのか…？」

「ふふ、味方。だと言つたら私は貴方達と仲良く出来るのかしら？ 優しいのね、でも。甘いわ。そんなんじゃないつか殺られるわよ？」

「ごもつともな意見だ。だが、私の主人はお人好しと言うか、敵である竜の魔女とも争い

たくなないと考える阿呆だ。全く、古い鏡を見ているようだよ。」

「ふふふ、昼間の戦闘を見ていた限りでは貴方の方がよっぽどお人好しだったわよ？古
い鏡と言うのは過去の自分のことを言っていたのかしら？その考えはそれこそ甘いけ
れど、正しいと思うわよ？」

「…どうも」

「あら、連れないのね。で、話を戻すけれど、私は貴方たちの味方では無いわ。魔女に令
呪を使われれば貴方達と敵対する羽目になるしね。」

「では、一体何をしに来たんだ。」

「助言、と言うべきかしらね。と言うか貴方の力量を見極めさせてもらうわ。」

「と、言うこと？」

「今日見た限りでは貴方、一番戦い慣れてるわね？」

あー、騎士王様も居たみたいだけれど貴方の方が断然マシね。」

「少し買いい被りすぎでは無いかね？昼間のあの戦闘だけでよくそんな事を言いきれも
のだな。」

「ええ、私、そう言うのは得意なの。」

「なるほど、では、見極めるとはまさか？」

「ええそうよ、まあ、察しは付くわよね。負けるつもりも毛頭ないけれど、今ここで私に

勝たないと竜の魔女に勝つなんて無謀も甚だしいわよ。」

「なるほどな。君はよつほどの善人のようだ。」

「やめてよ、私はそんな大それた人間じゃないわ。そうね、ここでの戦いが終わったら是非とも貴方達の所に喚んで欲しいわね。」

「だいぶ気が早い気がするが、歓迎するよ。私の慧眼が正しければ君は料理が出来るな？ウチは私しかつくられる人間が居なくてな、君がカルデアに来てくれるだけで大助かりだ。」

「まあ、そんなことまで分かるのね。英霊の千里眼は見えるものが色々あつてホント飽きないわね。」

「ふつ、因みにだが、君の精神的疲労。君は自分の素を隠していないか？」

「…そこまで分かるの？ちよつと引くわね。」

「生まれつきだよ。さて、それでは始めよう。」

「…自分から言つておいてアレだけど、貴方とはなんか戦いたくないわね。」

「きつと根が優しいからだろう。どうする、辞めるのか？」

「いいえ、それではここに来た意味が無いもの。」

「了解した。」

「じゃあ、お願い。タラスク！」

「…祈りの聖女、マルタか。」

「あら、私の事を知っているのね。嬉しいわ。…でも、私はそんな大それた人ではないと、言つたはず…よっ!」

距離を一気に詰められ迫る拳にエミヤは咄嗟に反応した。

「ぐっ…!まさか、一撃食らつただけで干将を折るとは。」

「まだ終わらないわよ!ハアツ!」

『聖女』という呼び名からは想像もつかない力と瞬発力。もはやタラスクを主力として戦うと考えていたエミヤからすれば頭が追いついていない状況だ。

「タラスク!」

「なにっ!?!」

マルタの猛攻により下がりがりながらいなし続けていたエミヤは後ろから高速で回転しながら迫ってくるタラスクに咄嗟に剣を打ち、壊れた幻想で自分ごと爆風によつて難を逃れた。

「何よそれ!貴方、意外と突拍子もない戦い方をするのね。」

戦っているうちに思い出した。出会つた時からどこか初めてあつたような気がしない!このもどかしい気持ち。

(ああ、なるほどな。)

マシユの件から桜を思い出し。今、自分は最も特別な感情を抱いている彼女のことを思い出した。

「こんな大事なことを忘れていたとはな。」凜……悪いが、ここからは全霊で行かせてもらおう。」

「ツ！良いじゃない。燃えてきたわ！」

戦闘がより白熱していき勝敗が着いた時には周りは木が粗方なぎたおされていた。

2人の戦闘音に気がついたジャンヌは慌てて音のする方へ向かった。

結果だけ言えばエミヤの勝ちだった。マルタの胸に1本の剣が貫かれており、右手でマルタが迫ってきた勢いを殺すため抱き寄せている構図となっていた。

「……ぷっ。」

「俺の、勝ちだな。」

「ええ……そう……みたいね。」

「ありがとう。君のおかげで大切なことを思い出せたよ。」

「それは、よかつたわね。」

「ああ……ありがとう。」

「それじゃあ、私が消えるまでこのまま抱いて貰えるかしら？」

「それくらい、お安い御用さ。」

「…暖かいわね」

「そうだな。」

それだけ言い残しマルタは光と共に消滅した。

「エミヤさんっ！」

「ジャンヌか、」

「敵襲ですか?！」

「いや、もう終わったよ。次の行き先が見つかった。」

「なにが、あつたんですか? 悲しい顔をしています。でも、嬉しそうな、複雑な表情を。」

「何もなさ。さあ、もう遅い、私達も少し休むとしよう。」